



『ベナー ナースを育てる』

著：P. ベナー, M. サットフェン, V. レオナード, L. デイ
 訳：早野 ZITO 真佐子
 A5 版・388 ページ
 定価：4,200 円(本体 4,000 円+税 5%)
 発行：医学書院(TEL 03-3817-5657)

日本にもいかなる看護教育変革の提案

評者◎田中美恵子 東京女子医科大学看護学部教授

一言で言って、勉強になる本である。一人の看護教育者として、いろいろと考えさせられながら読んだ。

本書は、カーネギー財団による一連の専門職教育に関する研究の一環として、米国における看護学教育に焦点を当てて行われた大規模調査を1冊の本として著したものである。

研究の中心となったのは、世界的に高名で日本でも大変人気の高いパトリシア・ベナー博士である。

問題の視座は、高度テクノロジーの導入や市場経済に左右される医療環境を背景として、看護実践の急激な変化が起こっているが、果たして、そうした現場に迎えられるナースを輩出する教育が行なわれているのか？ このような現場で役割を果たすことのできるナースを育てるにはどのような教育が必要なのか？ というところにある。この問いは、そのまま日本の看護教育にも当てはまる。重大で頭の痛い問いである。

博士はいう。「新人看護師は、知識や技術革新が驚くべき速さで進む多様な環境において、安全に、正確に、かつ慈しみ深くケアを行えるよう教育されなければならない。新人が職場に入るときには、自主的学習を通して学び続ける準備ができているべきである」、そして「今日の看護実践と看護教育の間には大きなギャップがあり、(中略)看護教育は、現在の看護実践で求められているものを満たすためには劇的に変革される必要がある」まさにしかりである。

この本では、こうした危機的な要請に答えるた

めに、「看護教育変革のビジョン」が最終章で示されることとなる。単なる抽象的な議論に終わることなく、問題解決のための具体的な提言が示されている点で、極めて実践的な本である。そして、これらの提言は、問いそのものが共有される日本の看護教育にとって、多くの示唆を与えるものである。

しかも、こうした現実的な問いが、哲学的にも方法論的にもベナー博士のこれまでの研究におけるスタンスと一貫性を保ち、その延長線上で展開されている点が、非常に興味深い。データは、インタビューと観察をメインとして収集され、ソフトウェアを一部用いて質的に分析され、テーマが明らかにされるとともに、パラダイムケースが同定されている。学生や教員、1人ひとりのインタビューに基づき、かつパラダイムケースを用いての提示という点で、看護教育の内実が手に取るように伝わってくる。日本の現実にそっくりそのまま当てはまるような古くて新しい問題もあり、いちいち頷いてしまうことも少なくない。本書は、奇しくも質的研究がいかに現実を変革するために役立つ方法であるかを示している点でも価値がある。

本書の主要な主張は、臨床教育と教室教育を統合することの重要性にあるが、そのほか、「形成」「重要性・非重要性の識別力」「臨床的想像力」「倫理的想像力」といった概念など、これまでとは違った視点から教育方法を再編するための有益な示唆を提供する本である。翻訳も大変読みやすく、訳者に敬意を表する。